

私としては日本国民の一人として、俯仰天地に恥ない行動を終始することを裁判長にお誓い致します

(出光興産創業者 出光佐三)

出光佐三は反骨の人である。生涯、英米石油資本（メジャー）に頼らぬ自主独立の精神を貫いた。

1945 年（昭和 20 年）8 月。佐三は敗戦の 2 日後、従業員に対し、「愚痴をやめよ。世界無比の三千年の歴史を見なおせ。そして今から建設にかかれ」と訓示した。自主独立は佐三の持論である。独立して国家と国民、人類の幸福のために尽くせと激を飛ばした。そのため「馘首してはならぬ」と訓示した。中国などの外地から 800 人もの従業員が引き上げて来る。全員を引き受けたら人件費倒産してしまう。幹部たちは「大量解雇はやむを得ません」と反論した。これに佐三は激怒した。「君たち。店員（＝社員）を何とと思っているのか。店員と会社は一つだ。家計が苦しいからと家族を追い出すようなことができるか。会社を支えるのは人だ。これが（当社の）唯一の資本であり今後の事業をつくる。人を大切にせずして何をしようというのか」。人間尊重の経営をとらえた佐三の経営哲学の核心がここにある。「民族資本、民族経営」を掲げた佐三は、内外の敵と戦った。外の敵は英米石油資本、メジャーである。戦後の日本の石油産業の支配下にあった。メジャーと組まないと原油が手に入らなかった。原油輸入のための外貨割り当てで縛りをかけ、メジャーと提携しない会社には輸入できないようにした。内の敵は日本の同業者と政府である。同業者は、値段の高いのに品質の劣る石油商品を市場に大量に流した。政府にはたらきかけて出光を石油統制機構から締め出そうとさえした。GHQ（連合軍総司令部）の圧力に屈した日本政府は、メジャーの息のかかった外資系精製会社を優遇し、自前の石油会社を育てようとしなかった。占領下の日本の石油精製会社 14 社のうち、6 割は完全にメジャーに支配され、3 割は半分支配されていた。独立系は出光のみ。石油統制機構の輸入原油と外貨の割り当てを行う組織だった。佐三は、自社の独立を脅かす一切の妥協を拒んだ。そのため、カルテルから締め出された。孤立無援、四面楚歌のなか自前の 18,000 トンの巨大タンカー、日章丸を駆ってメジャーに戦いを挑んだ。最初は米西海岸にロサンゼルスの中堅石油会社からの輸入を計画した。これが第一の矢である。この計画をメジャーに阻まれると、第二の矢を放つ。パナマ運河を超え、メキシコ湾岸やベネズエラから輸入するという離れ業を演じた。だが、ここにもメジャーの手が回った。佐三が考えた第三の矢。それがイランからの直輸入だった。佐三は 1952 年（昭和 29 年）暮れから 1953 年（昭和 28 年）2 月にかけて極秘にイラン政府と交渉し、同国の原油の購入契に漕ぎつけた。ここで仕掛けた奇襲がアバダン行きであった。3 月 23 日、日章丸は出光興産神戸油槽所を静かに出航した。イランのアバダン港に向かうことを知っていたのは、佐三と日章丸の船長、機関長の 3 人だけだった。日章丸は 4 月 10 日にアバダン港に到着した。石油を満載した日章丸は 4 月 13 日、他船との交信を一切やめ、ひそかにペルシャ湾を抜け出した。帰路はシンガポールに基地を置く英海軍の監視を考慮してマラッカ海峡を避けた。水深が浅くて巨大タンカーにとって危険なジャワ海を通るなどして英国の包囲網をくぐり抜けた。5 月 9 日、川崎港に入港した。英国政府とメジャーを向こうに回して勝利記者会見で、こう言い放った。「一出光のためという、ちっぽけな目的のために 50 名の乗組員の命と日章丸を危険に晒したのではない。国際カルテルの支配を跳ね返し、消費者に安い石油を提供するためだ」。独立からわずか 1 年後、日章丸のイランからの油の直輸入ほど、敗戦と占領に打ちひしがれた日本人の心を奮い立たせたものはなかった。胸のすくような快挙に国民は狂喜した。

佐三は敗戦の 2 日後に従業員に何と言いましたか？

()